

vol. 2280

【発行】大分県高等学校教職員組合教宣部 大分市大字下郡496-38 大分県教育会館  
TEL / (097) 556-2838 FAX / (097) 556-8998 MAIL / ohtwu@view.ocn.ne.jp

# 大分県高教組情報

【発行者】大野 真二 【印刷】(株)佐伯コミュニケーションズ 【売価】30円(組合員の購読料は組合費の中に含んで徴収しています)



## 今号の掲載内容 (掲載順)

- 第29回高校教育シンポジウム
- 8.15 戦争に反対する県民集会
- 専門部からの学習会報告 ～養護教諭部～

**九協の仲間が集い、対面開催！**

## 第29回高校教育シンポジウム

第29回高校教育シンポジウムが、8月1日～2日にソレイユ(大分市)で開催されました。九州各県の高教組組合員が集い、高校教育の課題について2日間議論をしました。

この集会のテーマは、「山積する教育問題の解決と、憲法と子どもの権利条約の理念の実現をめざす高校教育改革」です。

全体会では、日教組中央執行委員の中谷正史さんが、「指導要録・進学用調査書の改定について」や「1人1台パソコン端末配備」等、高校教育における情勢や課題について報告をしました。その後、分散会で3会場に分かれ、レポートをもとに議論をしました。大分高からは、第2分散会で首藤哲治郎さん(執行委員・

宇佐産業科学分会)が『大分県の普通科全県一通学区制の課題について』、第3分散会で深藏剛さん(学校司書部・鶴崎工業分会)が『大分県の学校図書館、学校司書を取り巻く現状』と題して報告をしました。

2日目は分散会後、閉会行事を行い、各分散会の司会者から分散会の様子や議論した内容について報告がありました。最後に、来年開催県の福岡高教組より挨拶があり、集会を閉じました。

新型コロナウイルス対策を十分に行った上での対面開催でした。お互いの表情を見ながら、熱心に協議することができ、改めて対面の重要性を感じた会でした。また、第3分科会はWebを併用して、多くの参加者が集うことができました。

参加した組合員のみなさん、お疲れ様でした。

全体会の様子

中谷中央執行委員挨拶

大野真二執行委員長挨拶

## 分散会テーマおよび参加者感想

### 【第1分散会】

報告県	レポート名
福岡	『スクールソーシャルワーカーとの連携による生徒支援』
鹿児島	『どうせ、学校は俺をやめさせるんだろ！～学校生活に課題を抱える生徒とのかかわりについて～』
熊本	『熊本県立学校の「通級による指導」の現状と課題－担当教員へのインタビュー調査から－』

#### <参加者感想>

○分散会の発表は3本で、通信制・定時制（多部制も含む）高校からであった。主な課題は、困難を抱えている生徒の生活・学習・進路支援について、高校の通級による指導の実態についてであった。

福岡のSSWと連携した生徒支援では、欠席が少なく、単位が取れている生徒にはどうしても抱えている困りを気づきにくく、卒業前の進路指導で初めて気づく、という報告にはその通りだと思った。鹿児島の通信制では全日制からの転学で生徒数が増えている状況で、生徒とのかかわりを作ることが課題であると感じた。高校通級については、始まって5年目に入り、各県とも取り組みが落ち着いてきているが、共通して抱えている問題は、担当する教員が加配などの措置をされることも少なく、希望する生徒すべてを受け入れることが難しいということ、また、教科書も教材もなく、自分で自立活動の授業内容を考えなければならないが、特別支援教育をあまり知らない教員が担当になり、苦労しているという実態があった。今後は担当教員が異動になった後引き継ぐ教員をどうしていくかが課題になるであろう。  
(別府支援分会 土谷充章)

○各レポートの報告を聞いて、いろいろな背景を抱える生徒達にどう向き合っていくかを改めて考えさせられた。教育相談についてシステムの構築、外部団体との連携など、現状は不十分ではあるがすすめていかなければならない。また、これまではあまり理解できていなかった「通級による指導」について、少し学ぶことができた。「その生徒がどう楽しく過ごせるかを考えなければいけない」という言葉が印象的だった。久々の対面開催で、九協の仲間のつながりを感じることができたし、とても充実した集会であった。(執行委員・仁木史絵)

### 【第2分散会】

報告県	レポート名
沖縄	『スタディサプリを利用した演習時間の確保』
宮崎	『本校の抱える問題点から見えるもの～中高一貫教育及び学区制撤廃の状況～』
大分	『大分県の普通科全県一通学区制の課題について』

#### <参加者感想>

○第2分散会での話題は、「0校時」見直し、タブレットの活用、中高一貫、学区撤廃等々、どの現場でも共通するものばかりでした。様々な課題を抱える制度・仕組み、これらを撤廃すれば問題は解決するのかと言えば、そんな単純なものではないと思います。教育のあり方が変化を求められていることは事実です。その一方で、守り続けていかなければならないものもあります。我々に課せられた責任は重い、そのことを再確認した貴重な機会でした。  
(中津南分会 中島マミ)

○全県一通学区制（学校選択制）の課題について論議し、他県も、学校選択制が生徒・保護者への負担を強い、地域間格差を生む、という課題を抱えていることが報告されました。九州の仲間たちと集い、課題を共有し、それぞれの取り組みを聞く、という会に久しぶりに参加でき、新鮮な気持ちになりました。人と人が繋がっていくことの安心感や力強さ、熱を感じ、その大切さを改めて認識できたのは嬉しいことです。多忙な日々だからこ

そ、仲間たちと集う機会が明日への活力となる組合活動でありたいと感じた二日間でした。

(執行委員・宇佐産業科学分会 首藤哲治郎)

### 【第3分散会】

報告県	レポート名
大分	『大分県の学校図書館、学校司書を取り巻く現状』
鹿児島	『司書って 専門職じゃないの? 2022』

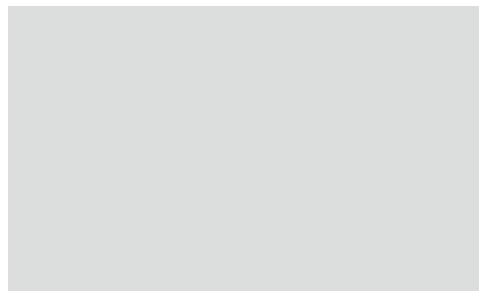
#### <参加者感想>

○2日間、リポーターとして参加しました。都合によりZoomでの参加でしたが、他県の学校司書の方々と有意義な意見交換ができました。大分県の学校司書の現状について報告をしましたが、急速に変わり続ける学校現場の中で、学校図書館の明るい材料の少なさ、残された時間が限られている事に改めて気づかされました。他県でも学校司書の不安定な運用が拡大している話を聞き、危機意識を共有することができました。次回へと引き継げる各県の課題一覧表作成に漕ぎ着けた事は一つの成果だと思います。(鶴崎工業分会 深藏剛)

○第3分散会は、Web参加も含め、2日間で18名の参加でした。鹿児島、大分の学校司書の現状レポートを中心に各県の状況を報告しあい、総括討論ではさまざまな課題のネックとなっている学校司書を定数法に位置づけることについてや、今後のこの会での情報交換のための一覧表作成について確認しました。学校司書を取り巻く状況は各県で違いがあるもの大変厳しい状況です。ここでの議論を各県でのとりくみにつなげてほしいです。

(日田分会 湯浅真見)

○レポートは鹿児島高「司書って専門職じゃないの? 2022」と、大分高の「大分県の学校図書館、学校司書を取りまく現状」の2本。2日目には、福岡高より「若手職員の人材育成を図るとりくみについて」の報告があり、内容は「採用後、概ね5年以内に教育委員会事務局等と学校の両方の業務を経験させる」というものであった。学校図書館に常駐する学校司書を配置するため、「学校司書の定数法位置づけのとりくみ」が熊本より提案され、趣旨を確認して閉会した。学校司書が継続的・安定的に職務に従事できるよう、協力してとりくみたい。(別府鶴見丘分会 小野陽子)



## 8.15 戦争に反対する県民集会

とき 8月15日(月) ところ アイネス

「8.15に反対する県民集会」が開催され、大分高教組からは5人が参加しました。

記念講演では、沖縄国際大学の前泊博盛さんが、「復帰50年－沖縄が問う日本の憲法、主権、安保、地位協定－～軍は民を守らず、民を盾に敵と戦う～」と題して、Webで講演をしました。内容は、①沖縄「復帰50年～現状と課題、そして展望～ ②日米安保体制と日米地位協定～「旗国法原理」を超え「領域主権」へ ③地位協定改定を阻む8つの壁 ④ロシア・ウクライナ戦争と中台危機の中の日米安保」と多岐にわたるものでした。

前泊さんは、基地を抱える沖縄の現状を詳しく述べられ、「軍隊は民を守らない」ことを力説されました。また、辺野古新基地建設の理由の一つである『「世界一危ない」普天間基地』という言葉の陰に、普天間以上に事故の多い嘉手納基地の危険性が隠されている、という指摘もありました。

ロシアのウクライナ侵攻は一向に終わりそうにありません。また、日本でも米軍の軍事演習により危険に晒されている地域がいくつもあります。

今こそ私たちは「平和」について改めて考え、そして「核廃絶」にむけてとりくみをすすめるべきではありません。

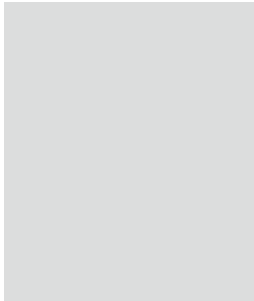
# 養護教諭部学習会

## 養護教諭部 夏季学習会を開催しました！

とき 7月23日(土) ところ アイネス

例年、養護教諭部では、夏季に学習会を実施し、タイムリーな講演と情報交換で、部員相互の活力につなげています。なかなか集まらないご時世ですが、このような学習の機会を設け、久しぶりに一同、顔を合わせることができました。

講演はZoomでしたが、佐伯支部会場とも繋いだり、県教組にも声をかけ、たくさんの方の参加がありました。始めに、中山養護教諭部部長が、「コロナ禍において、高校においても様々な負担が大きくなっている現状があり、本日の命の安全教育は、タイムリーな内容であり、改めて学習して伝えていけたら、と思う。」と挨拶をしました。



中山養護教諭部部長

### <講演について>

**講演** 『生命の安全教育』を“からだの権利学習”として展開しよう  
～文科省教材を批判的に読み活かす視点～

**講師** 村末 勇介さん

琉球大学教育学研究科准教授。元鹿児島県小学校教諭（鹿児島県教組）。教員養成・研修に携わる傍ら、教師や保護者に向けた教育講演会、子どもたちに向けた性教育の飛び込み授業を続けている。

著書：『子どもの“いのち”に寄り添う仕事～教室で物語が生まれる～』が大好評発売中



『コロナ時代』にあって、日常的な関わりの希薄化はすでに学校・家庭の双方が指摘され、課題となっています。学校は、朝の始まりから帰りまで、命の安全教育ができる場所だということを痛感され、性教育の実践に取り組まれています。教師としての根柢に基づいた性教育の視点が盛り込まれ、すぐに実践に生かされる内容でした。

#### からだが大切にされる場としての授業

- 子どもが安心できる場であること
- 「わからない・できない」が大切にされる場であること
- 共に学び合うことが心地よい場であること
- みんなが違っていることがあたりまえの場であること

人権尊重の視点を改めて気づかせてくれた内容でした。文科省の教材『生命の安全教育』についても分析され、深める視点を明確にいただきました。「コロナ時代」における連携のための創意と工夫を、感染予防としての物理的距離の確保と、からだ学習における配慮とともに柔軟に対応していく視点もお話いただきました。

### <参加者の感想>

- 教育活動全般を、子どもの権利条約で整理していくことや、文科省のものでも、しっかりと授業者が活用する工夫だけで内容が変わってくるなど、今後の自分のやり方を見直したいと思いました。
- 授業の前に、子どもの安全・安心を確保することに気をつけたいと思いました。また、受容し肯定的な体験を積むことができるような授業にしたいです。
- コロナに振り回されて性教育まで手が回らないのが現実です。その中でも「何かできる」と思わせてもらえるお話でした。
- Zoomで開催できたことは、今後の講師依頼の幅が広がり、良いと思う。（養護教諭部 中津南耶馬溪分会 衛藤早弓）